国際協力やＮＧＯで奮闘

「出口設定した活動を」
環境型ＮＧＯツアーに参加

経済学部国際経済学科の「ＮＧＯ論」（狐崎知己教授）を受講している塚本和起さん（経済3）は今夏、インドネシアへのスタディーツアーに参加。途上国の人々の暮らしやＮＧＯ（非政府組織）の取り組みを体験した。「現地受け入れ側との相互理解の大切さと共に、戦略を持ったＮＧＯの必要性を感じた」と言う塚本さんは、参加組織が主催する公開セミナーで発表を行った。

塚本　和起さん　経済3

▲ レロロジャ村の村長と一緒の塚本さん（右）

途上国でのスタディーツアーに参加し、理想的な援助のあり方を考える「ＮＧＯ論」は、今年も多くの学生が海外に出向き、国際開発協力を体験した。

その一人である塚本さんは、ＮＧＯ団体としてインドネシアでの活動を主体にするアジアＡＰＥＸ（Asian People's Exchange）を選び、同団体初のツアーに参加。9日間にわたるインドネシアの旅で、同ＮＧＯが取り組む灌木（かんぼく）ジェトロファ（ナンヨウアブラギリ）を活用する環境保全型地域開発の実態を視察した。

▲ ジェトロファの苗木を植樹する

ジェトロファは種子から軽油代替燃料となる油脂が採取できる木で、害虫に強く荒地でも育つ。プロジェクトは、同国の最貧困地域である東ヌサトゥンガラ州のフローレス島レロロジャ村で行われており、ジェトロファによる燃料の生産やガス化発電への利用などに取り組んでいる。

塚本さんたちは、村長や住民と交流・意見交換し、実際にジェトロファの苗木を植樹した。村の実情やプロジェクトの意義を探った結果、「村人たちは、外国人が協力していることに意義を感じ、非常に大きな期待を持っていることが分かりました」。

加えて同ＮＧＯの目的意識や、3年をめどにした取り組み手順の良さを知った。

「『ＮＧＯ論』の事前の授業で、活動には必ず『出口』を設定しないと受け入れ側の人材育成やネットワーク形成につながらないことを学びました」

塚本さんは帰国後も一緒にツアーに参加したＮＧＯスタッフや学生3人と交流を続けている。

「ＮＧＯ論」の授業や、所属する狐崎ゼミで成果の発表を行ったほか、ＡＰＥＸが主催するセミナー「大学生が見てきたインドネシア」（10月21日、東京・神宮前の環境パートナーシップオフィスで開催）で3学生と共にツアーの発表を行い、聴講者からの多くの質問に答えた。

父親の仕事の関係で、米国で暮らした経験がある塚本さん。大学では「英語力を上げるとともに国際協力に興味を持った」と言い、たどり着いたのが「ＮＧＯ論」の授業であり「途上国の貧困と開発研究」を学ぶ狐崎ゼミだった。

スタディーツアーの体験から、就職は、社会貢献に力を入れる企業を希望している。

人が普通に生きる社会を
国内外で積極的にボランティア

さまざまなボランティア活動を国内外で行っている飯野瞳さん（法3）。財団法人・信濃育英会の「明るい社会に貢献する学生の奨学制度」（※）の本年度奨学生に選ばれた。飯野さんの信条は、マザーテレサが生前語った「私の活動は大河のほんの一滴かもしれないが、それがなければ大河にはならない」に通じる。「小さな積み重ねが大きな力になると信じています」と飯野さんは目を輝かせながら語った。

飯野　瞳さん　法3

▲ 信濃育英会授与式であいさつする飯野さん

飯野さんは高崎市出身。特別養護老人ホームを訪ねるなど中学時代から始めたボランティア活動は専大に入学して、より積極的に展開するようになった。

国際協力サークルＳ・Ｉ・Ａ（Senshu International Association）に所属、代表（前期）を務めた。発展途上国の貧困のメカニズムや実態を学ぼうと1年次の春、カンボジアの孤児院やＮＧＯが運営する学校などを視察。帰国後、川崎市のカリタス学園小や神奈川県立ひばりが丘高生を前に発表会を開いた。特に、プノンペン近郊のゴミ山で働く子どもたちにインタビューした映像は話題を呼んだ。

▲ カンボジアの子供たちと

昨夏は約2週間、インド・カルカッタのマザーテレサ創設「死を待つ人々の家」で、貧困や病気で死を目前にした患者に付き添うボランティアを行った。

「お別れの日、交流のあったおばあちゃんから涙ながらにキスされました。言葉が分からなくても人は通じ合える、この時に痛いほどそう思いました」

また、神田キャンパスのある東京・千代田区で心身障がい者の余暇活動充実のためサポートを1年次から続けている。

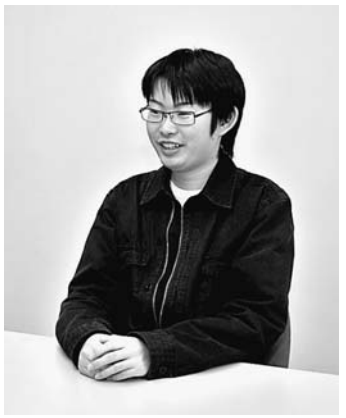
後押ししてくれたのは、法学部のゼミ活動（石川一雄教授）。国籍や民族、背景が違った人たちが同じ視点に立ち、平等な社会を目指す多文化共生を学ぶゼミだ。「さまざまな顔かたち、考えの人々が、違和感なく普通に生きる社会になったらいい」と力を込める。

信濃育英会の授与式は10月4日、東京・杉並区の信濃育英会本部で行われた。本年度は30大学52人が応募し、飯野さんら12人に授与された。

奨学金は、女性の人身売買の実態を調べるためのネパール行きに使う予定だ。「シェルターを訪ねインタビューしたい。卒論として重いテーマだけれど、そこに横たわる貧困を、違った側面から明らかにしたいと思います」。

※信濃育英会「明るい社会に貢献する学生の奨学制度」　ボランティアなど社会貢献活動をしており、指定大学が推薦した中から選ばれた奨学生に奨学金40万円を給付する。専大生は、07年度の車いすをインドネシアに贈る活動を続ける戸津亜里紗さん（院文修1）以来3年連続で授与された。

他大学生との議論が自信に
「OneDay国会インターンシップ」に参加
金子翔太郎さん（法3）



法学部3年次の金子翔太郎さんは、9月10日に民主党青年局が主催した「OneDay 国会インターンシップ（参議院）」に参加。その様子は、読売新聞の夕刊に掲載された。

中学生のころから、選挙報道を見るのが好きだったという。開設2年目の政治学科に進み、現在はイタリア史の伊藤武ゼミに所属。「人のため、地域のためになる仕事を」と公務員を目指している。「3年次の夏に将来につながる行動をしよう」と目標を立て、ホームページでこのインターンシップを見つけた。

当日は、長妻昭・党政策調査会長代理（当時、現厚生労働大臣・年金改革担当大臣）の講演を聞いたのち、議員事務所を訪れ、秘書や政策スタッフに質問するなどして、業務の現場に触れた。実習では、「若者が政治に興味を持つには、どのようにすればいいか」をグループごとに議論し、プレゼンテーション。「学校など教育の現場に、議員が出向いて、直接話すことで『政治』を身近に感じるようになるのでは」などといった提案が出された。

「昼食時に、江田五月参議院議長に声をかけてもらい、緊張しましたが、政治の現場を身近に感じることができました。他大学のさまざまな考えをもった学生と議論した経験が自信になり、後期からのゼミ活動に生かされています」と話している。

福富プロジェクト　ネット情報
学びの成果を学外に発信
「ＪＡＭ2009」に出展

ネットワーク情報学部の福富忠和プロジェクトでは、学びの成果を学外に発信している。

大竹恒平さん（3年次）をリーダーとするグループは、10月15日から18日まで東京・秋葉原で開かれたジャパン・アニメ・コラボ・マーケット（ＪＡＭ）２００９に出展。ＪＡＭは、アニメ産業における二次利用・商品化の売り上げ規模に焦点をあて、ライセンス素材協力作品の商品化企画を募集し、市場の拡大を狙う見本市で、大竹さんらはアニメキャラクターの使っているアイテムの可視化をコンセプトに、登場人物が身につけているヘッドフォンのデザインや機能をアレンジした作品を展示した＝写真。

▲ 手前から大竹さん、清田祥平さん、石橋広紀さん

このほか、同プロジェクトでは、川崎市・新丸子の和菓子店の商品企画も行っている。12月下旬には販売される予定。